静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関するアンケート調査結果
－平成 20 年度－

平成 22 年 2 月 5 日

白木 賢信（東京家政大学）

Ⅰ　調査結果の概要

①　センターの代表的な利用者が小学生で、1 泊の利用が最も多い。これらは昨年度と変わらないが、2 泊の比率が今年度のほうが若干高くなっている。利用団体の種類は、学校関係が全体の半数を占めており、特に小学校は全体の約 3 割であることはほぼ昨年度と同様であるが、今年度は青少年指導者の比率が 10 ポイント高くなっている。

②　利用目標について、1 泊以上になると「自主性や協調性、社会性を身につける」が高くなることは昨年度と変わりないが、今年度は「3 泊以上」では「その他」の比率も高くなっている。一方、昨年度は違いが見られた利用団体の種類別については、今年度は殆ど違いが見られなくなってきている。

③　利用目標の達成度は殆どが「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」でこれも昨年度と同様の傾向で、利用目標の種類別についても、利用目標が「その他」の場合は昨年度と同じく「期待以上にできるようになった」の比率が 3 割を超える。その他、今年度は「新たな余暇活動の楽しみ方を身につける」でも 1/3 が「期待以上にできるようなった」である。また、「3 泊以上」で「期待以上にできるようになった」が 3 割に達していることも今年度の特徴である。

④　利用後の参加者の変容は「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「時間を守るようになった」「周りの人に優しく接するようになった」の上位 3 項目は昨年度と変わりない。さらに繰り返し利用することによって予想される変容との関連を見ると、こちらも上位 3 項目は「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「時間を守るようになる」「周りの人に優しく接するようになる」で、利用目標の達成度が低いほうでこの予想の比率が高くなるという結果も見られる。

Ⅱ　調査の概要

1.　目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中､それ以外の評価指標としての基礎資料を提示する。

2.　内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

・利用団体の種類
・利用団体の主たる年齢層
・利用宿泊数
・利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
・利用目標の達成度
・利用後の参加者の変容
・繰り返し利用することによって予想される変容

3.　対象

平成 20 年度のセンター利用団体

4.　方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は下記の通り。

・センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙（別紙見本参照）を配付する。
・各利用団体担当者は、センター利用後約 1 ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

5.　調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率）　140（27%）　　有効回収率　140（27%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成 20 年度における統計上のセンター利用団体数（520 団体）を母数としている。

6.　実施期間

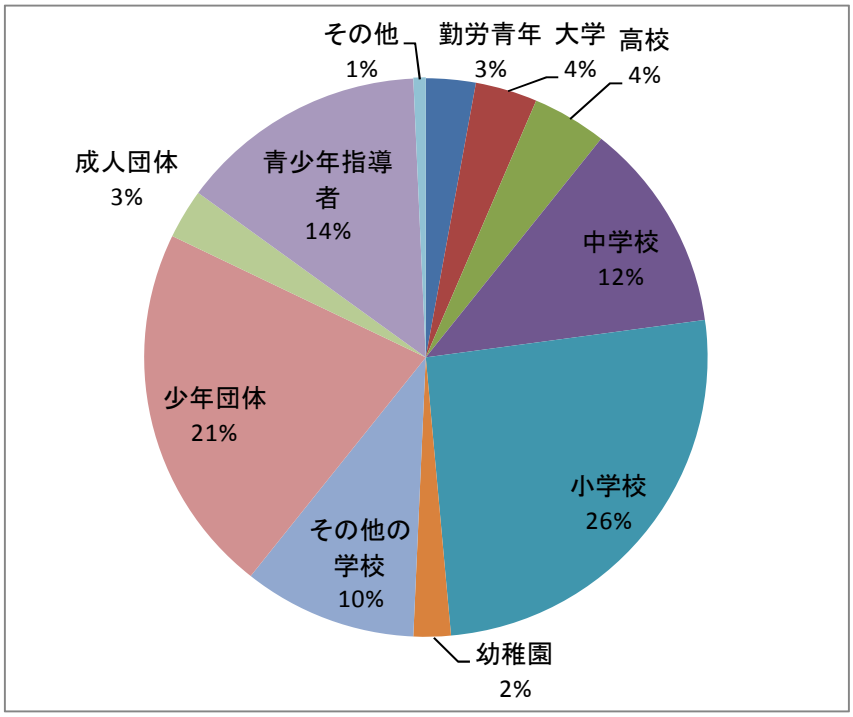
平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月

Ⅲ　調査の結果

1.　利用団体のプロフィール

まず、今回回答のあった利用団体のプロフィール（属性）を示すことにしよう。ここで取り上げるのは、利用団体の種類、利用団体の主たる年齢層、利用宿泊数の 3 つである。

利用団体の種類（単数回答）については、「小学校」が占める比率が最も高く 26%、次いで「少年団体」（21%）、「青少年指導者」（14%）、「中学校」（12%）の順になっている（図 1 参照）。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

専門学校(4)、特別支援学校(4)、スポーツ団体(4)、健全育成を目的とした家族利用(3)、教会学校(2)、塾(2)、子ども会(2)、青少年団体(2)、文化団体(2)、教育委員会(2)、保育所、協議会、障害者施設、就労支援組織、適応指導教室、学童クラブ、子育てサークル、

図 1　利用団体の種類

利用団体の主たる年齢層（単数回答）については、「7～12 歳」が最も多く全体の半分以上を占めている。次いで高いのは「13～18 歳」（24%）の比率が高い（図 2 参照）。

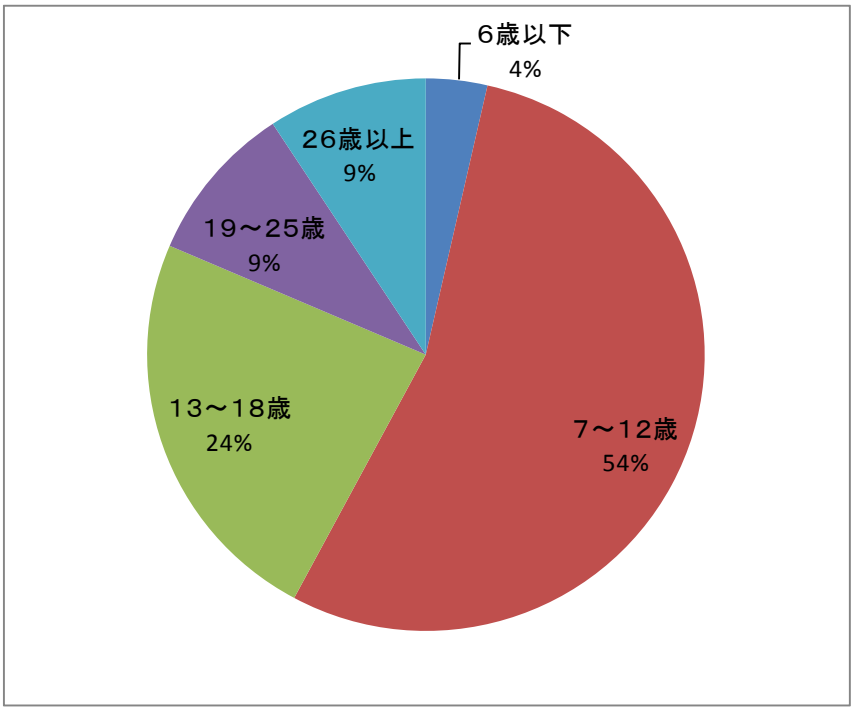


図 2　利用団体の主たる年齢層

利用宿泊数（単数回答）については、「1 泊」が最も多く 4 割であるが、次いで多い「2 泊」も 4 割に近い（図 3 参照）。

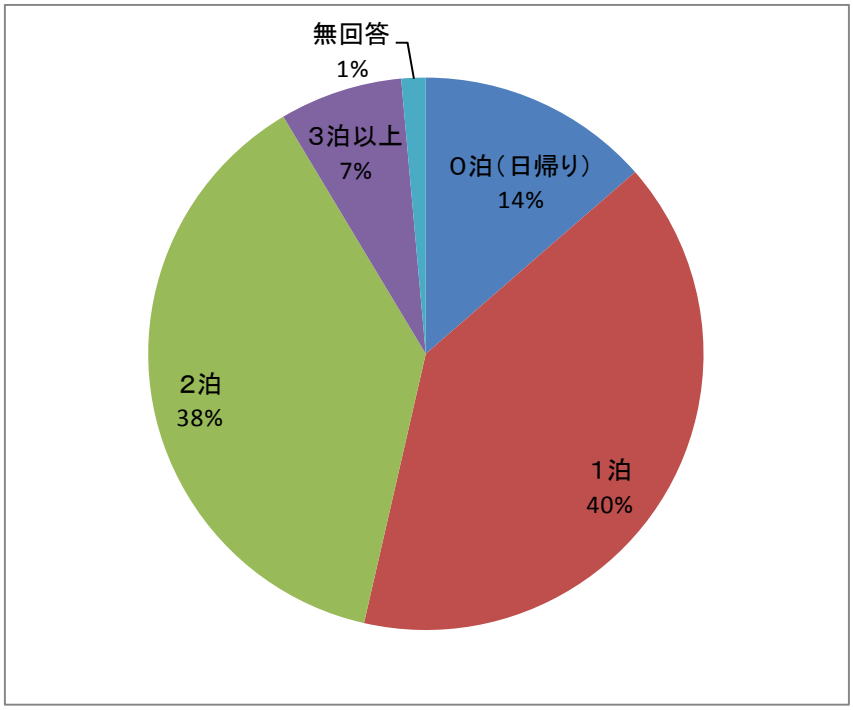


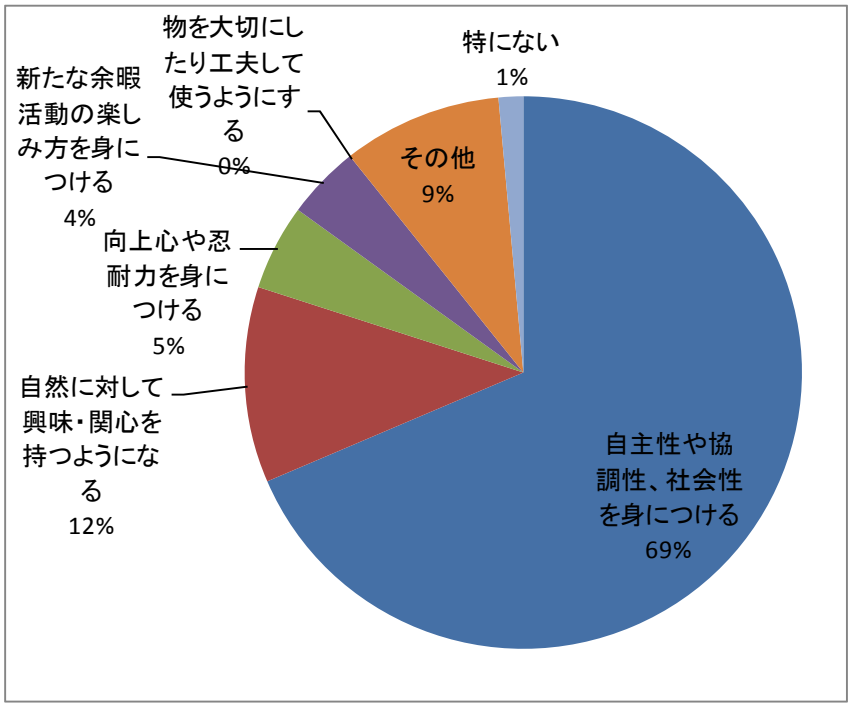
図 3　利用宿泊数

2.　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

次に、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を調べたところ、「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も多く全体の約 7 割を占める。次いで多いのは「自然に対して興味・関心を持つようになる」（12%）である（図 4 参照）。

なお、ここでの調査項目については、青少年の野外教育の振興に関する 調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成 8 年 7 月）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記 URL を参照（平成 20 年 5 月 15 日現在）。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/index.htm



「その他」の内訳

新入社員研修、朝霧のことをよく知る、普段と異なる環境の中での活発な意見交換友だち同士交流し、夏の一日をたのしくすごす、野外活動の指導者として自然の中での生活のしかた楽しみかたを学ぶ、活動を通じ互いの交わりを深める、年令をこえた仲間（友人）づくり、キャンプの技術（スキル）アップ、生徒会校外会議（リーダー研修会）、大自然の中で集中力を身につける、家族との絆・仲間の親睦を深める、スケートができるようになること、星に興味をもちスケートを通して五感をフルに活用しあきらめずにやってみる

図 4　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標について、利用団体の属性別のクロス集計をしてみたところ、全体で最も比率の高い「自主性や協調性、社会性を身につける」は「学校関係」の中では 7 割を占め、次いで高いのは「自然に対して興味・関心を持つようになる」（15%）である。一方、「その他団体等」では、最も比率の高いのは「学校関係」と同じく「自主性や協調性、社会性を身につける」で約 2/3 を占めるが、次いで高いのは「その他」（12%）である（図 5 参

照)。なおここでは、サンプル数の関係で利用団体の種類を「学校関係」と「その他団体等」のどちらかにカテゴリ統合している。

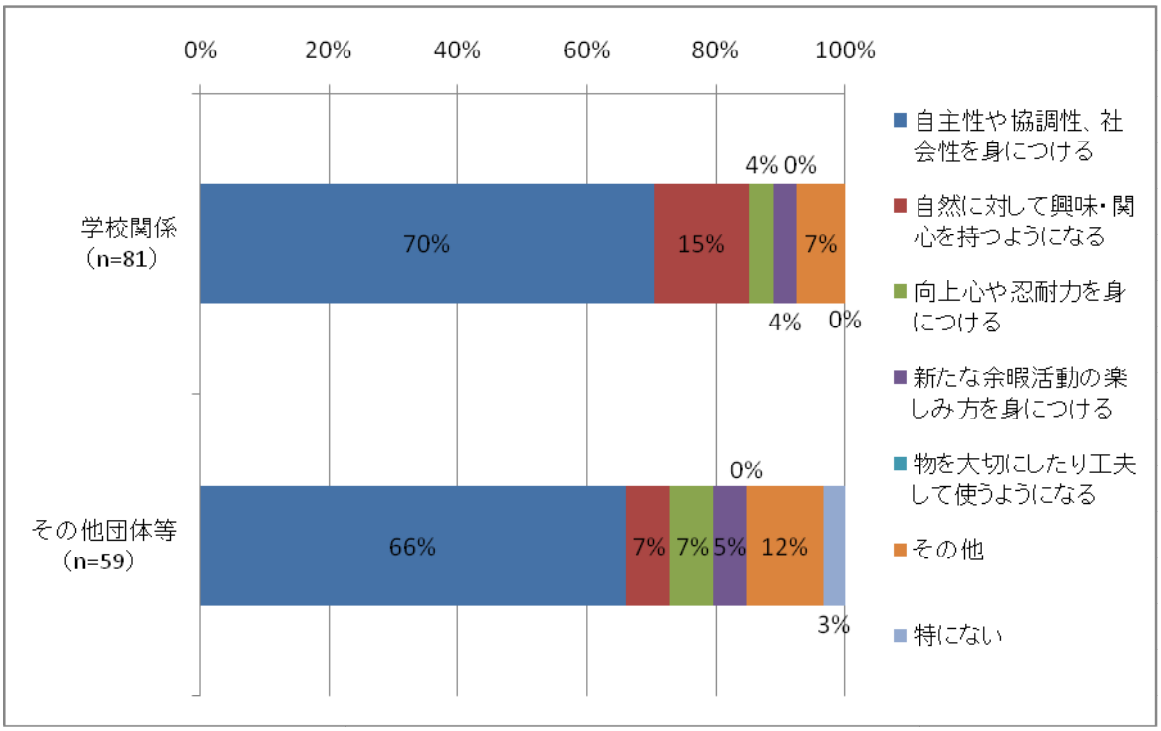


図 5　利用団体の種類別にみた利用目標

利用団体の主たる年齢層別にみた利用目標については、「12 歳以下」「13 歳以上」とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率が高くほぼ 7 割である。次いで高いのも「自然に対して興味・関心を持つようになる」であるが、「13 歳以上」のほうが若干比率が高く 14%である（図 6 参照)。なお、ここでもサンプル数の関係上、利用団体の主たる年齢層を「12 歳以下」と「13 歳以上」のどちらかにカテゴリ統合した。

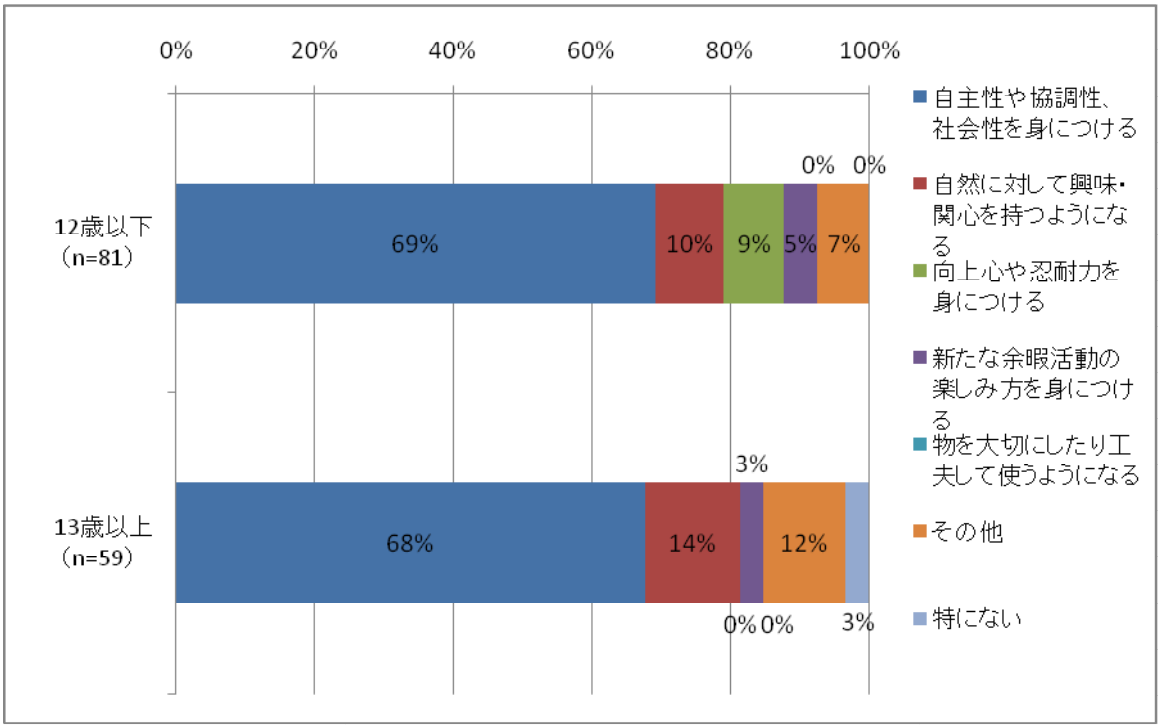


図 6　利用団体の主たる年齢層別にみた利用目標

利用宿泊数別にみた利用目標であるが、これについてはいずれも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も高く、「2 泊」では 9 割近くに達するが、「3 泊以上」では「その他」も「自主性や協調性、社会性を身につける」と同比率で最も高い（図 7 参照）。

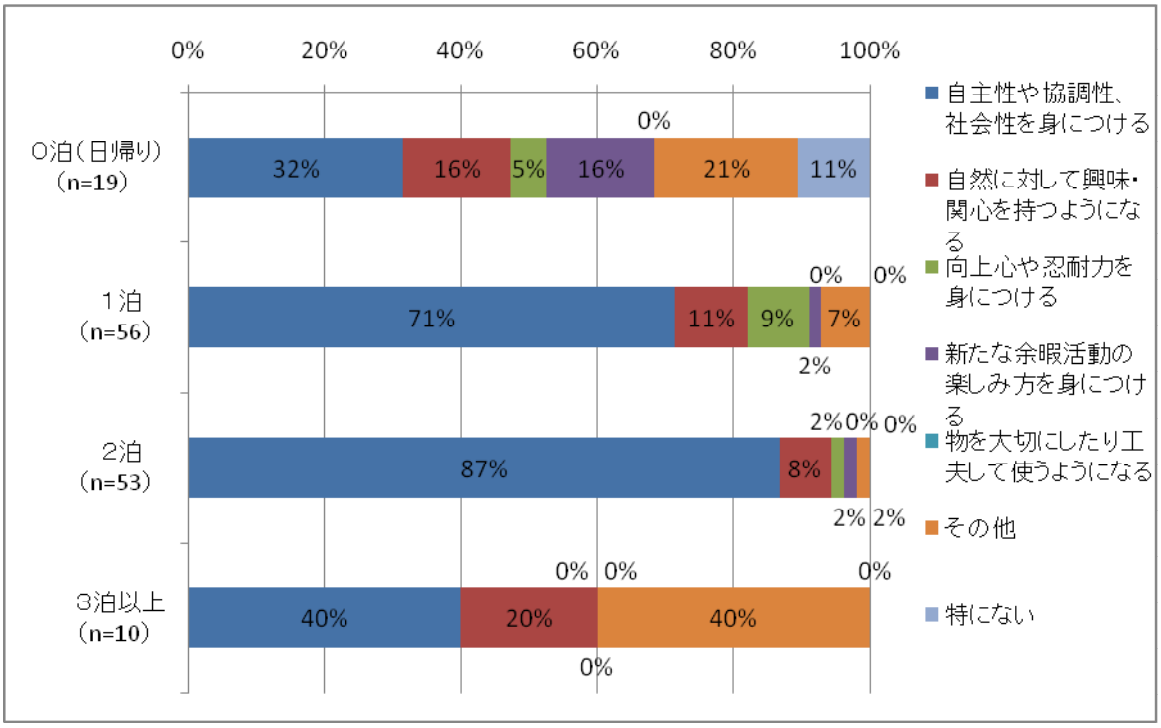


図 7　利用宿泊数別にみた利用目標

3.　利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」のいずれかで各団体自身が判断した。その結果、「だいたい期待通りできるようになった」が全体の 8 割近くを占め、次いで比率の高いのは「期待以上にできるようになった」（14%）で、両者を合わせると 9 割を超える（図 8 参照）。

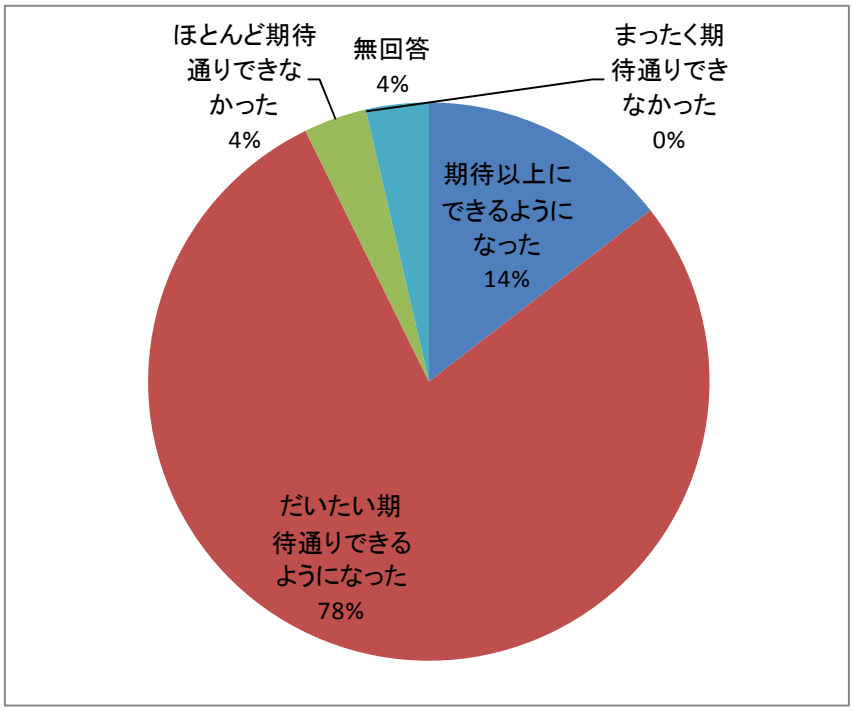


図 8　利用目標の達成度

この利用目標の達成度について、利用団体の種類別にみると、「その他団体等」のほうが「学校関係」よりも「期待以上にできるようになった」が僅かに高く、2 割近く達している。但しどちらの場合でも、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率が 9 割を超える（図 9 参照）。

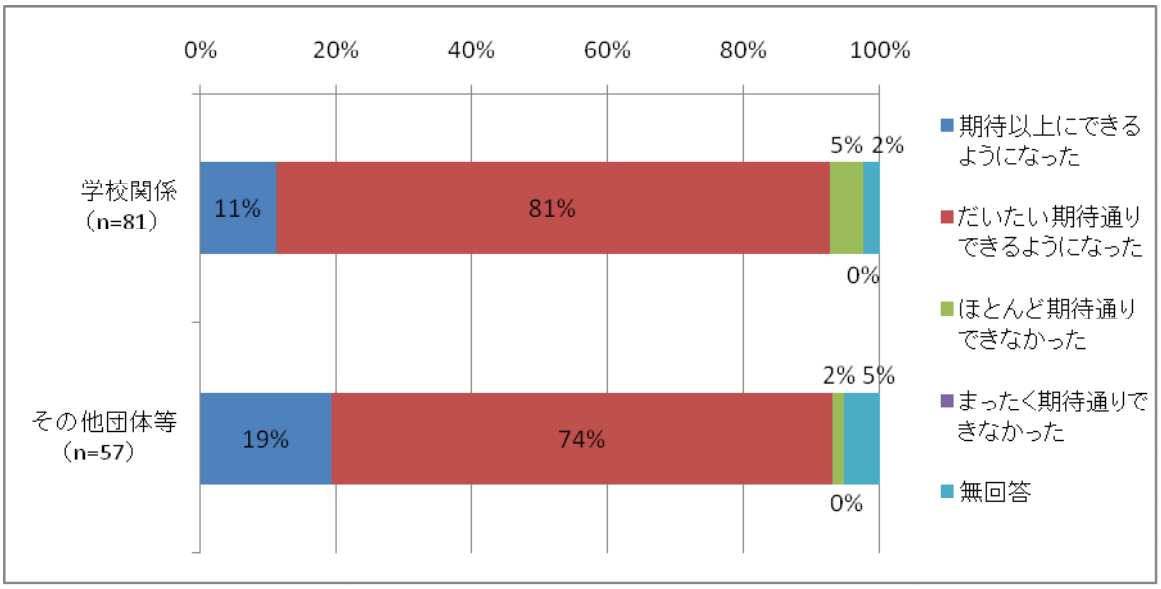


図 9　利用団体の種類別にみた利用目標の達成度

利用団体の主たる年齢層別にみた利用目標については、「13 歳以上」のほうが「12 歳以下」よりも「期待以上にできるようになった」が僅かに高くて 2 割を超える。但しどちらの場合でも、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率は 9 割を超えている（図 10 参照）。

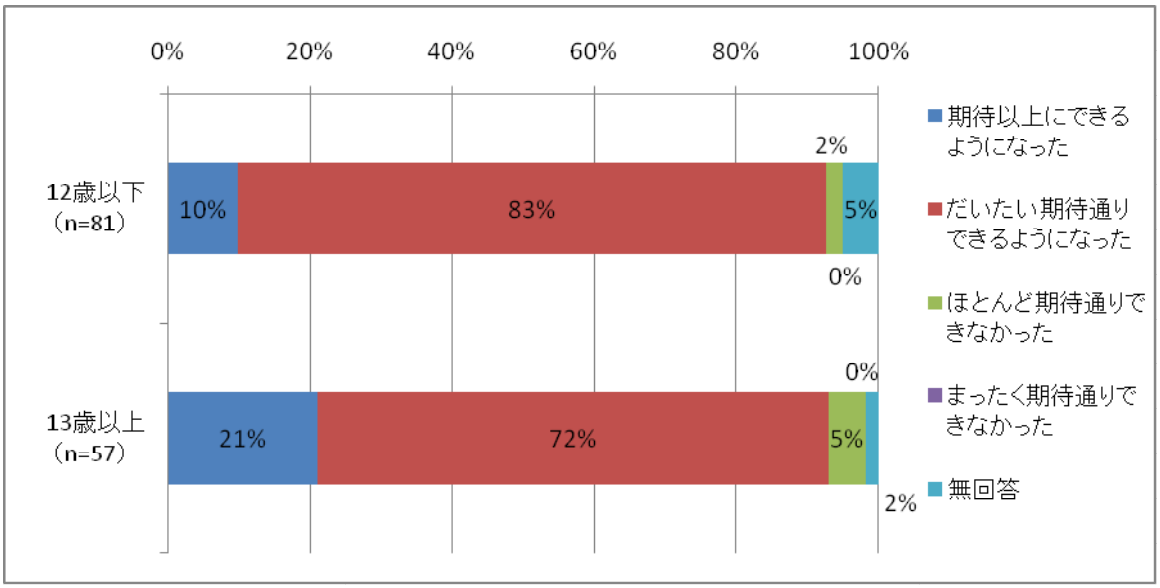


図 10　利用団体の主たる年齢層別にみた利用目標の達成度

利用宿泊数別にみた利用目標の達成度では、いずれの宿泊数にあっても、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率は 90～100%となっている。なお、「3 泊以上」では「期待以上にできるようになった」が 3 割に達している（図 11 参照）。

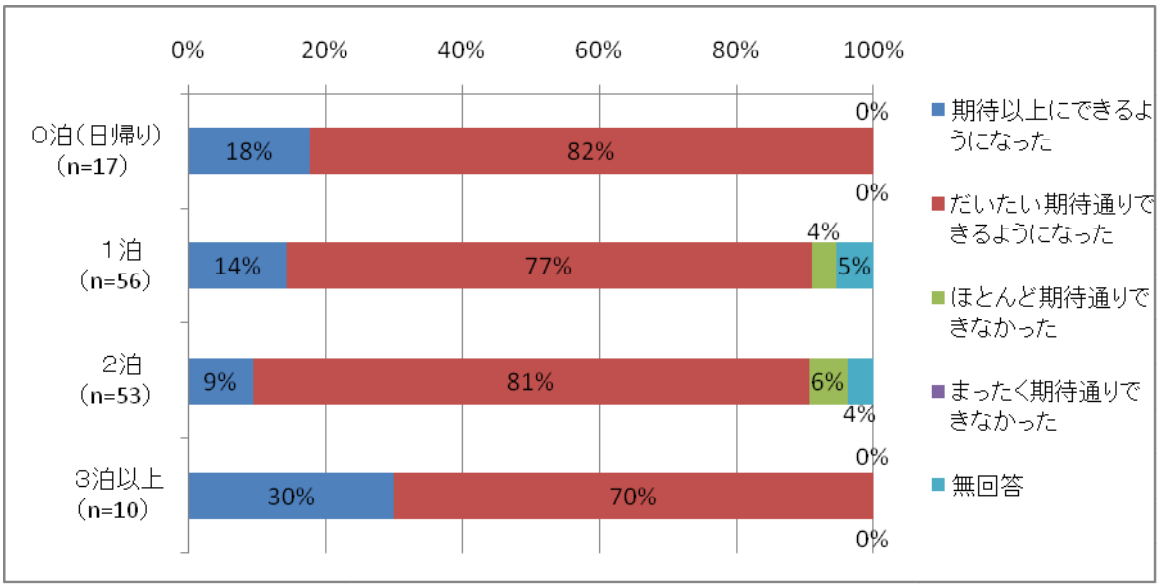


図 11　利用宿泊数別にみた利用目標の達成度

ここまでは、利用団体の属性別の集計結果を示してきたが、次に、利用目標の種類の違いでみた結果を示すと（図 12)、「期待以上にできるようになった」の比率が最も高いのは「新たな余暇活動の楽しみ方を身につける」が利用目標となっている場合でほぼ 1/3 に達している。次いで高いのは「その他」の場合で約 3 割である。

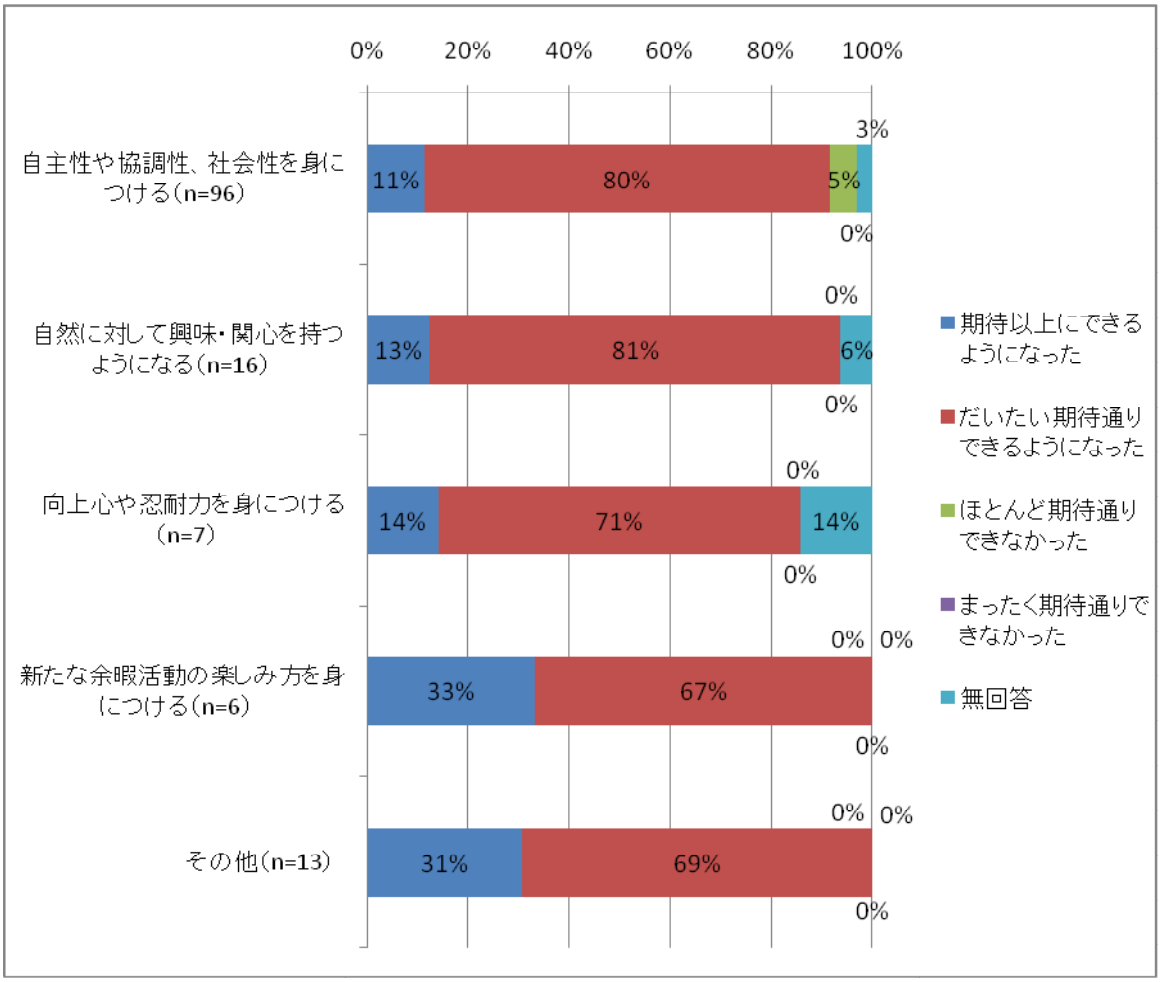
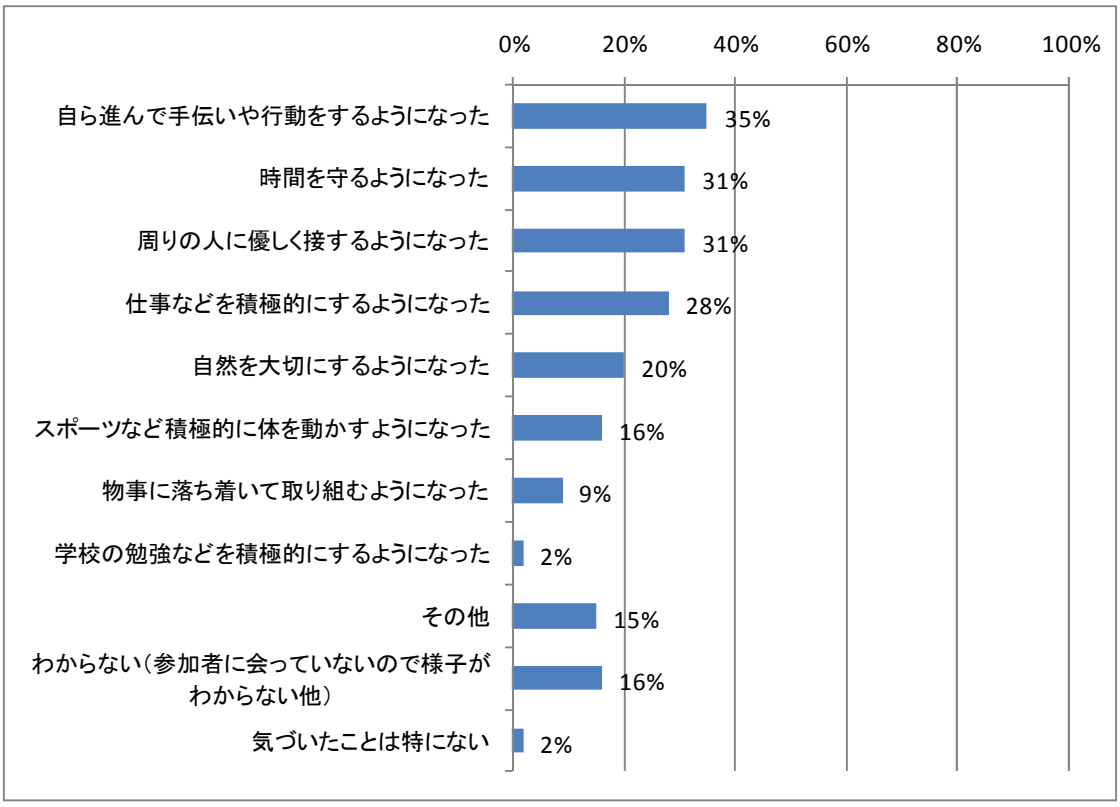


図 12　利用目標別にみた達成度

4.　利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後 1 ヶ月以内の変容のみを利用団体担当者が分かる範囲で捉えたが（複数回答・3 つまで）、それによると、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」が最も多く（35%）、次いで「時間を守るようになった」および「周りの人に優しく接するようになった」（ともに 31%）となっている。なお「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない、他）」という利用団体が 16%あった（図 13 参照）。



「その他」の内訳

仲間同士のつながりが強くなった、周囲との協調性が強まったようです、お互いの関係性が円滑になった、生徒間の友情が深まった、クラス間・学年間の交流が深まった、協力できるようになった、リーダーの自覚が出てきた、たくましくなった（精神的に）、理科の星の学習で積極的発言が見られ星座の本を借りて読む子がいた、児童が自分達の課題を自覚した、高学年の子が小さな子の面倒を見るようになった、あいさつ等マナーが向上した、人の話を聞くようになった、目標に対して意欲的にまた協力して取り組めるようになった、演奏技術が向上し協調性も向上した、班活動が協力的になった、友達が増え仲良くなった、他の学年の友達ができ交流ができるようになった、何かに取り組む時にがんばれるようになった

図 13　利用後の参加者の変容

この利用後の参加者の変容を利用団体の属性別でみることにしよう。まず、利用団体の種類別にみた利用後の参加者の変容であるが（図 14）、「学校関係」では「周りの人に優しく接するようになった」（37%）「時間を守るようになった」（36%）の順に比率が高い。一方、「その他団体等」では「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」が最も多く挙

げられており（46%）、これは「学校関係」の比率より 20 ポイント近く高い。次いで「時間を守るようになった」(25%)「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」(24%)が続いている。なお、「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない、他)」については、「その他団体等」のほうが多く挙げており 2 割を超える。

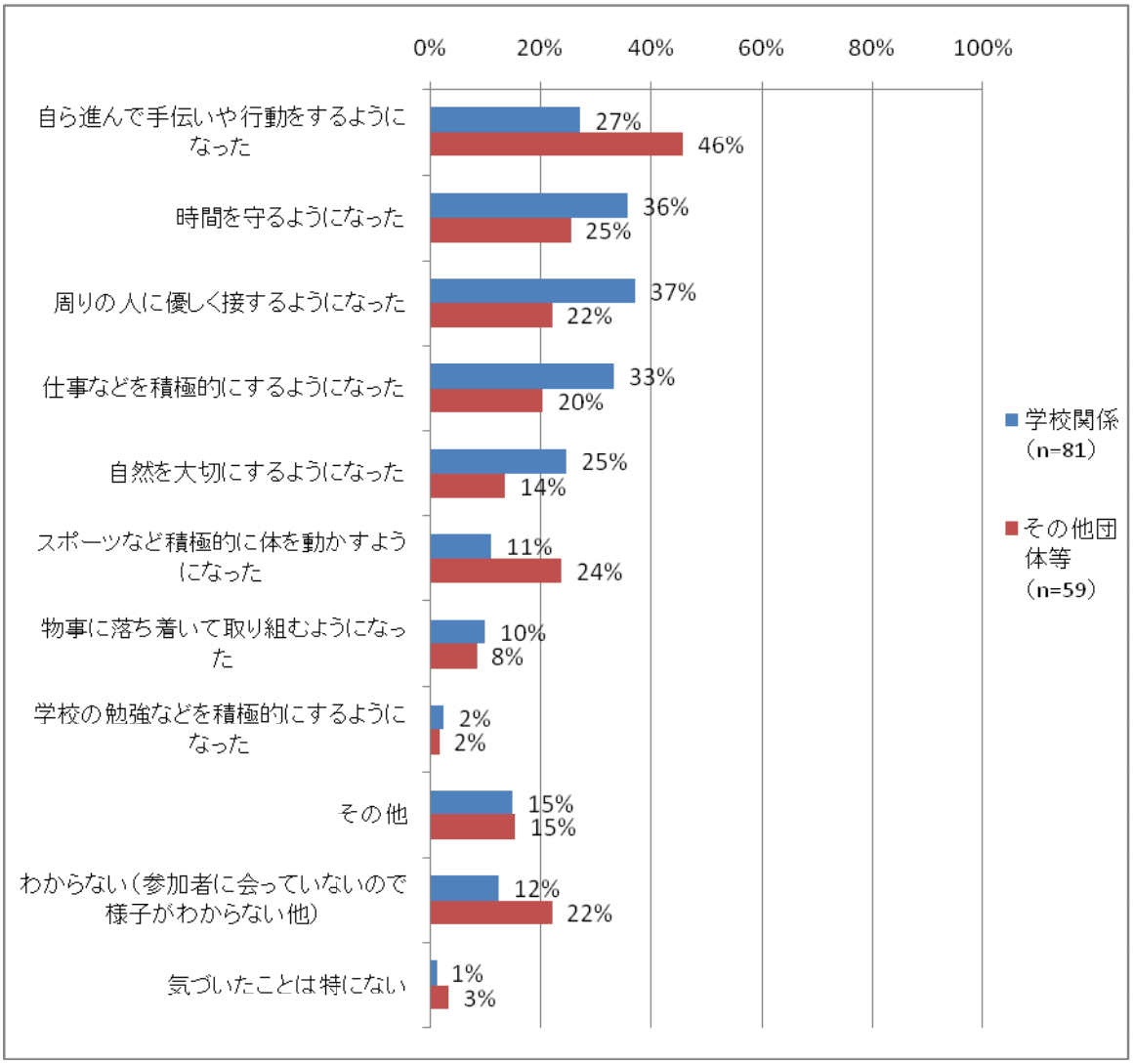


図 14　利用団体の種類別にみた利用後の参加者の変容

次に利用団体の主たる年齢層別にみると（図 15)、「12 歳以下」で最も多く挙げられているのは「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」で（35%）で、次いで「周りの人に優しく接するようになった」(33%）である。一方「13 歳以上」では、「仕事などを積極的にするようになった」の比率が最も高く（37%)、これは「12 歳以下」の比率より 16 ポイント高い。次いで高いのは「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」(36%)である。

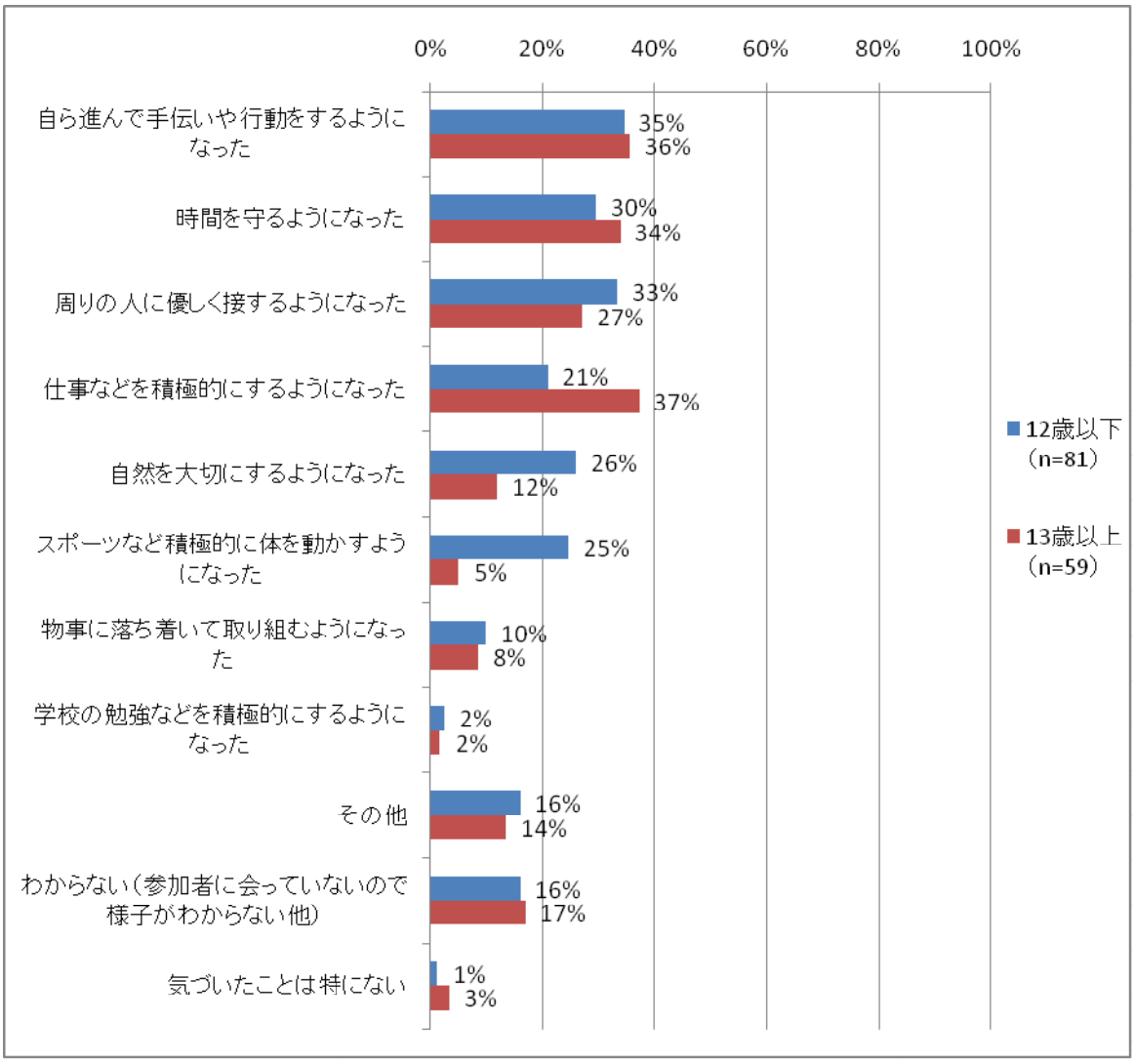


図 15　利用団体の主たる年齢層別にみた利用後の参加者の変容

利用宿泊数別にみた利用後の参加者の変容について述べると、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」は、泊数が増えるにつれて比率も高くなっており、「3 泊以上」では 5 割に達している。一方、「0 泊」の比率が最も高いのものには「スポーツなど積極的に身体を動かすようになった」が挙げられる（図 16 参照）。

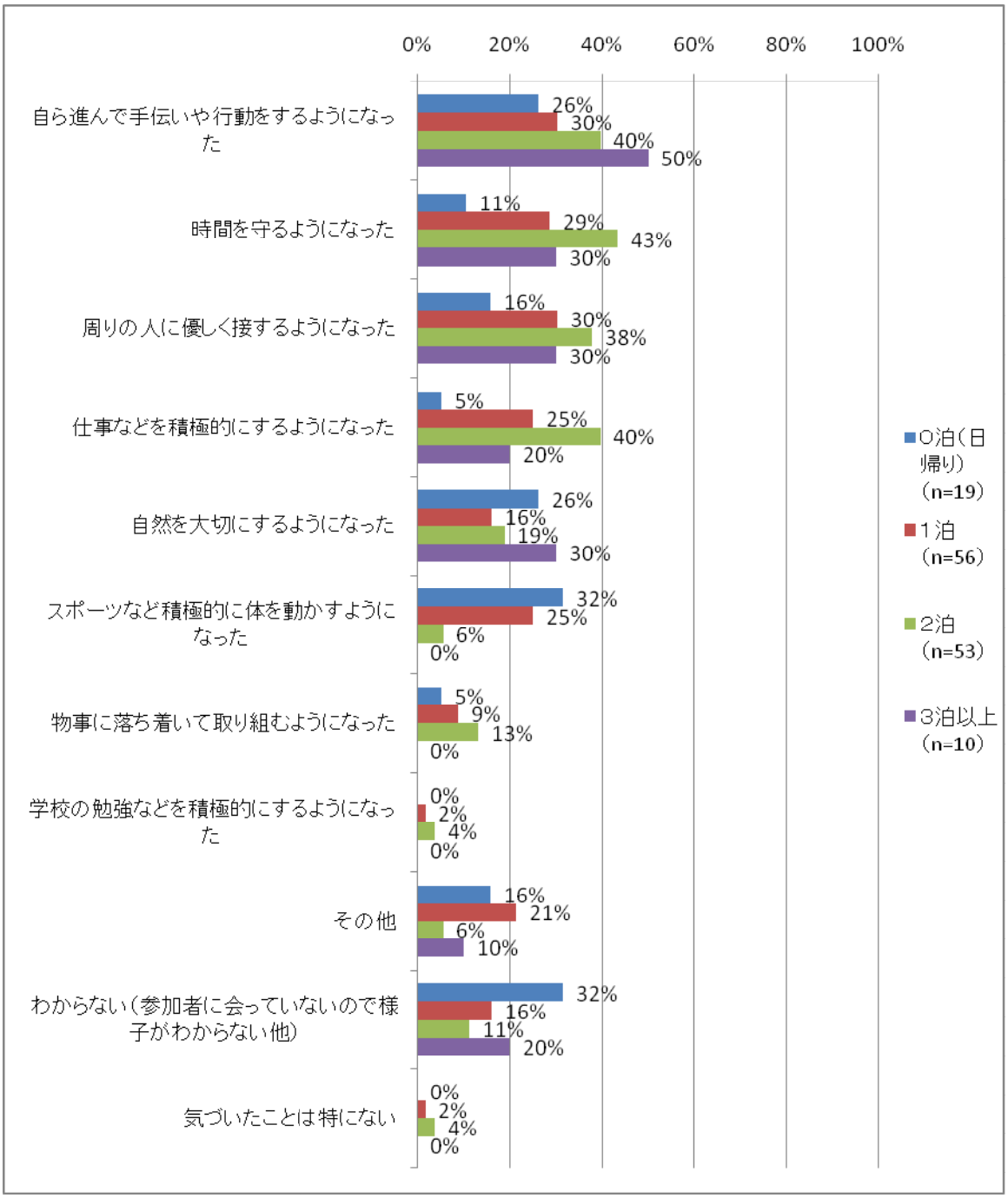


図 16　利用宿泊数別にみた利用後の参加者の変容

利用団体の属性別の利用後の参加者の変容は以上の通りであるが、さらに、これを利用目標の違いでみるとどのような違いが見られるかを検討した結果を示すことにしよう。その結果が図 17 であるが、それによると、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」は、利用目標が「自主性や協調性、社会性を身につける」のときに最も比率が高い（39%）。「時間を守るようになった」も同様に、利用目標が「自主性や協調性、社会性を身につける」のときが最も高く 36%である。「自然に対して興味・関心を持つようになる」が利用目標の場合には「自然を大切にするようになった」が 5 割に達し、「向上心や忍耐力を身

につける」が利用目標のときには「スポーツなど積極的に身体を動かすようになった」が4割を超える。

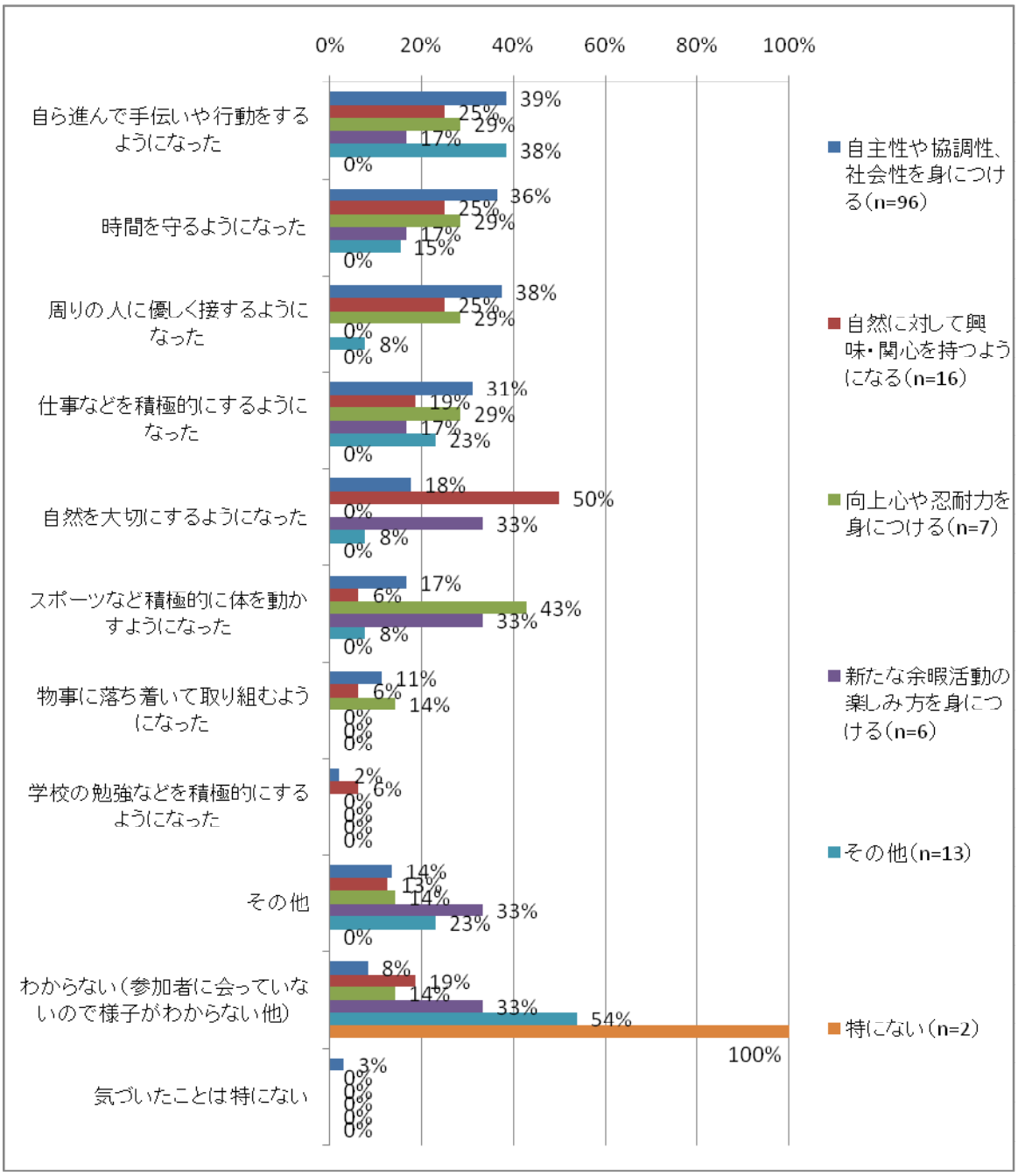


図 17　利用目標別にみた利用後の参加者の変容

図 17 は利用目標の種類別にみたものであるが、その目標の達成度別にみると、利用後の参加者の変容はどのようになるであろうか。それを集計したものが図 18 である。それによると、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」は、その達成度が高くなるにつれて比率も高くなっており、「期待以上にできるようになった」のときは 45%である。なお、「気づいたことは特にない」は、達成度が「ほとんど期待通りできなかった」ときに最も多く見られ 4 割である。

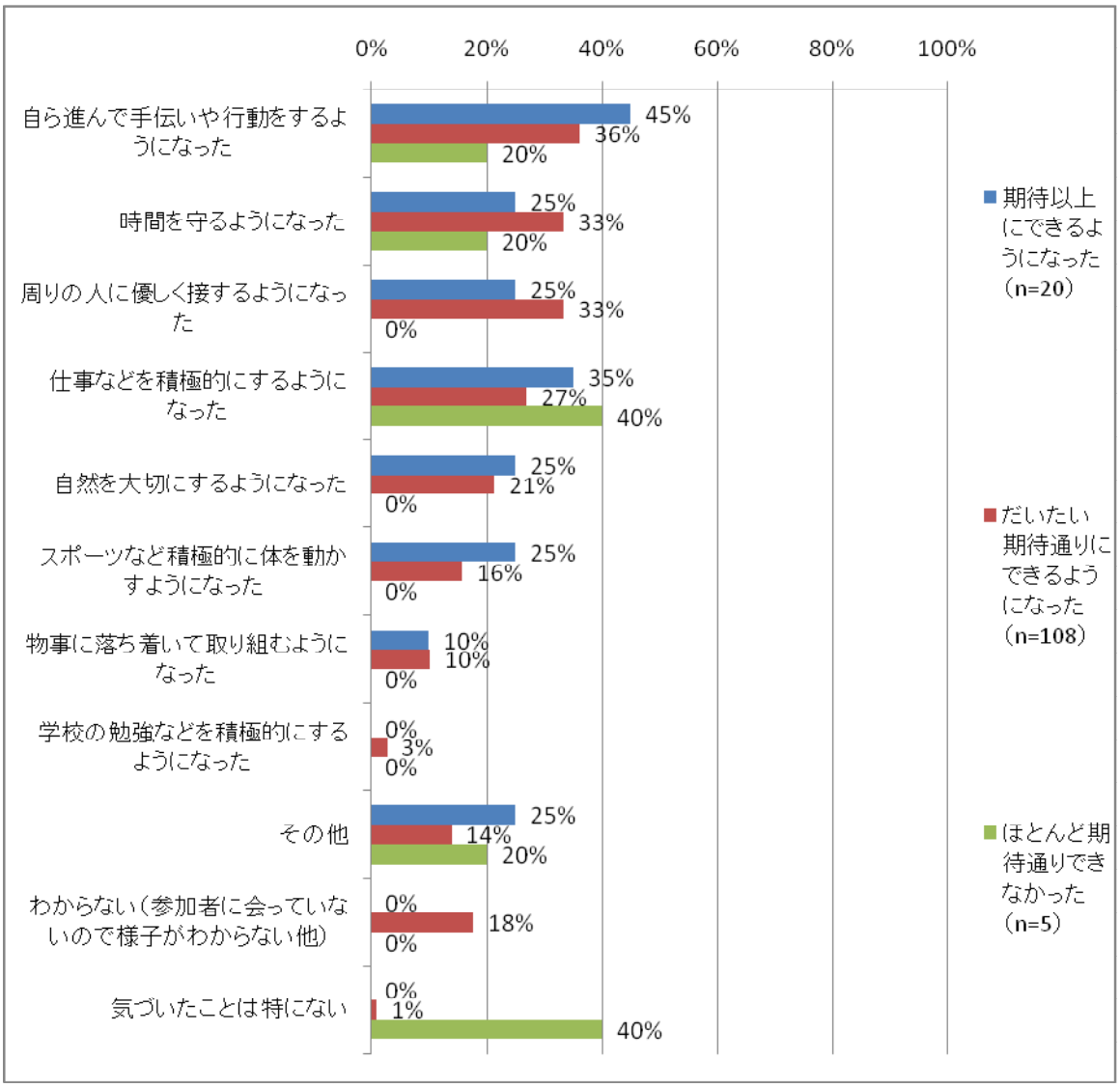
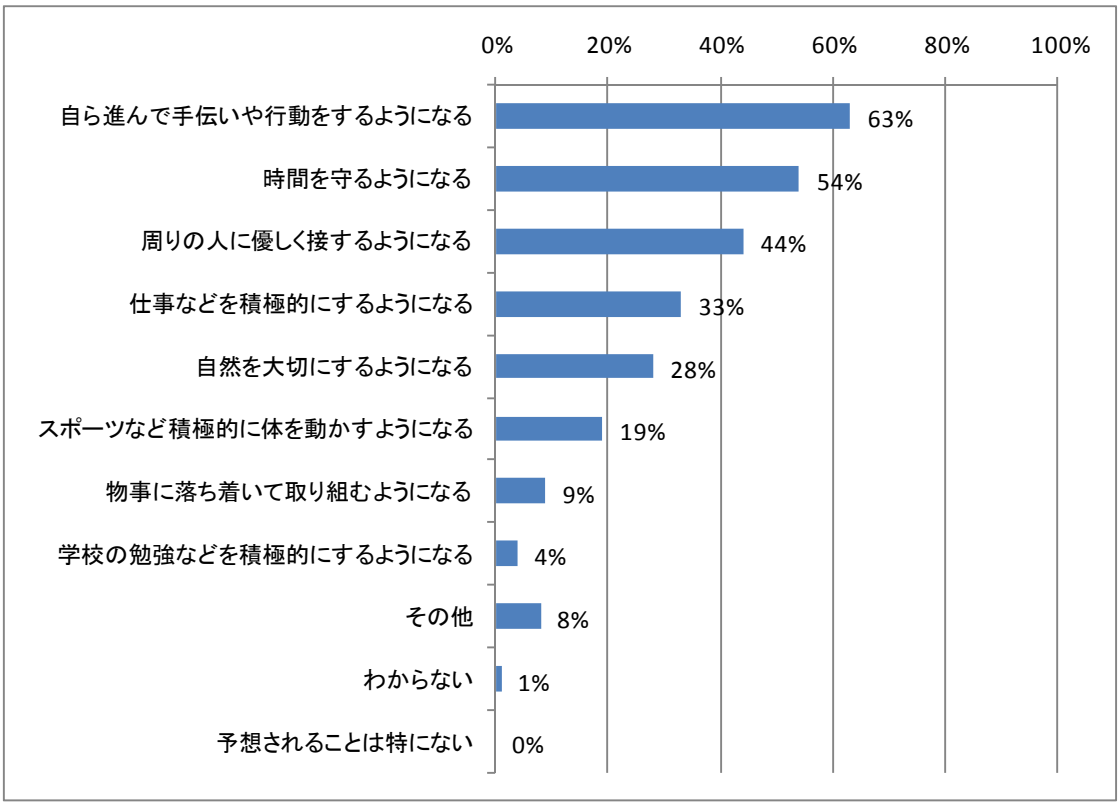


図 18　利用目標の達成度別にみた利用後の参加者の変容

5.　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えることにした（複数回答・3 つまで）。

その単純集計結果は（図 19）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」が最も高く 6 割以上である。次いで高いのは「時間を守るようになる」で 5 割を超える。なお、「予想されることは特にない」は 0%であった。



「その他」の内訳

友人が増える、協調性を持つことができる、初めてのことに積極的に挑戦するようになる、自主的に行動する力が向上する、企画力が身につく、演奏技術および音楽性の向上、生徒が重度のため親元をはなれ宿泊することは良い経験となる、班活動が協力的になる、学年を越えて他の学年の子との交流が持てるようになる、チームワークが強まる、周囲の人と協調性を持てるようになる、

図 19　繰り返し利用することによって予想される変容

次に、これを利用団体の種類別にみると（図 20）、「学校関係」で最も高くなるのは「時間を守るようになる」でほぼ 6 割である。一方「その他団体等」では、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」が 7 割を超える。「学校関係」と「その他団体等」の間で最も比率差のあるものは、「スポーツなど積極的に身体を動かすようになる」で、「その他団体等」のほうが 30 ポイント近く高い。

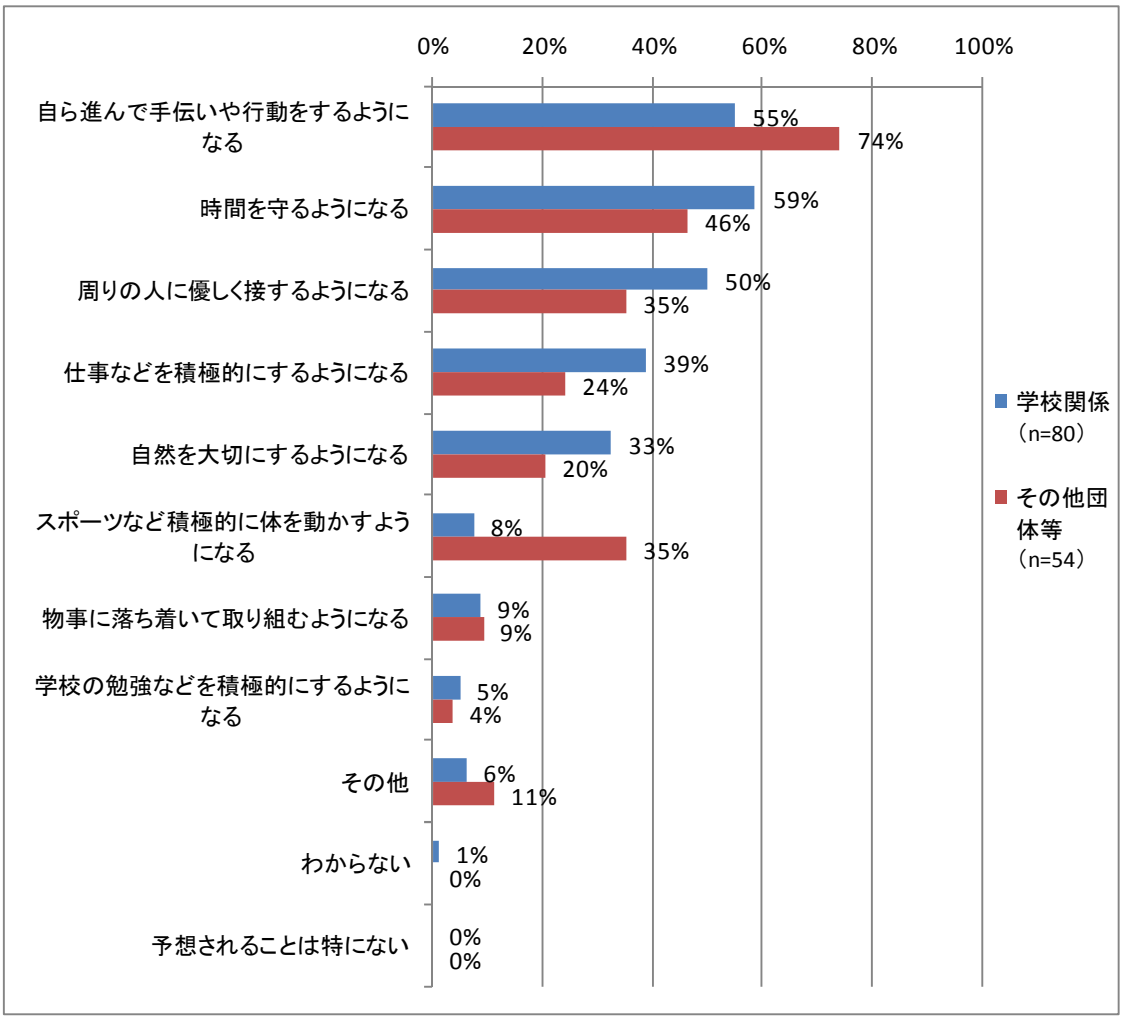


図 20　利用団体の種類別にみた繰り返し利用することによって予想される変容

利用団体の主たる年齢層別ではどうであろうか。図 21 によれば、「12 歳以下」のほうで比率が高くなるものには「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」が挙げられ、これは 7 割近い。また「スポーツなど積極的に身体を動かすようになる」では「12 歳以下」のほうが「13 歳以上」より 16 ポイント高い。一方「13 歳以上」のほうが高いものには「時間を守るようになる」（56%）などで、「仕事などを積極的にするようになる」は「12 歳以下」より 10 ポイント以上高い比率である。

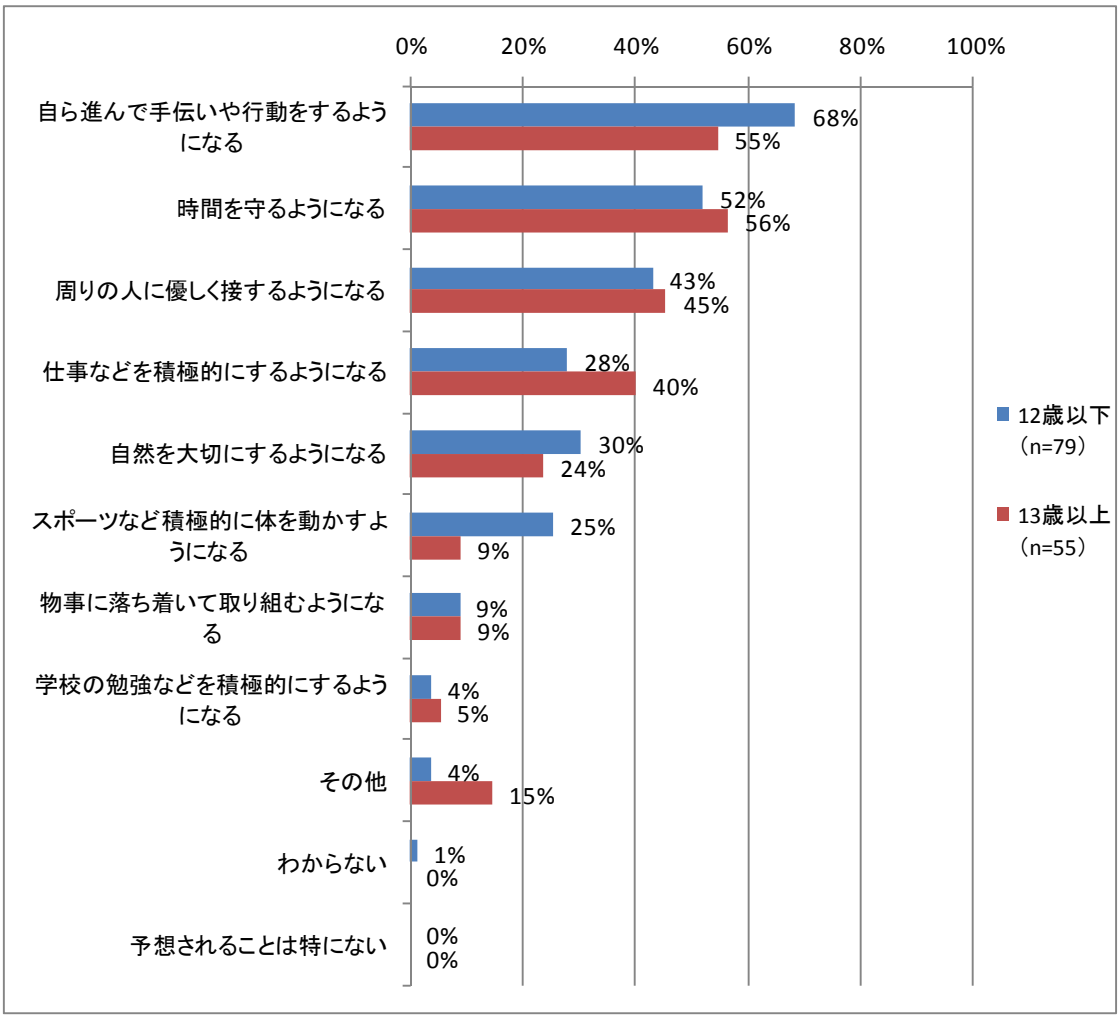


図 21　利用団体の主たる年齢層別にみた繰り返し利用することによって予想される変容

利用宿泊数別では（図 22）、「自然を大切にするようになる」で最も大きな比率差が見られ、「0 泊」から「2 泊」までは 20%台であるが、「3 泊以上」の利用になると 67%がこれを挙げている。その他、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」については、「0 泊」は 5 割以下であるが、「1 泊」以上になると 6～8 割に達する。

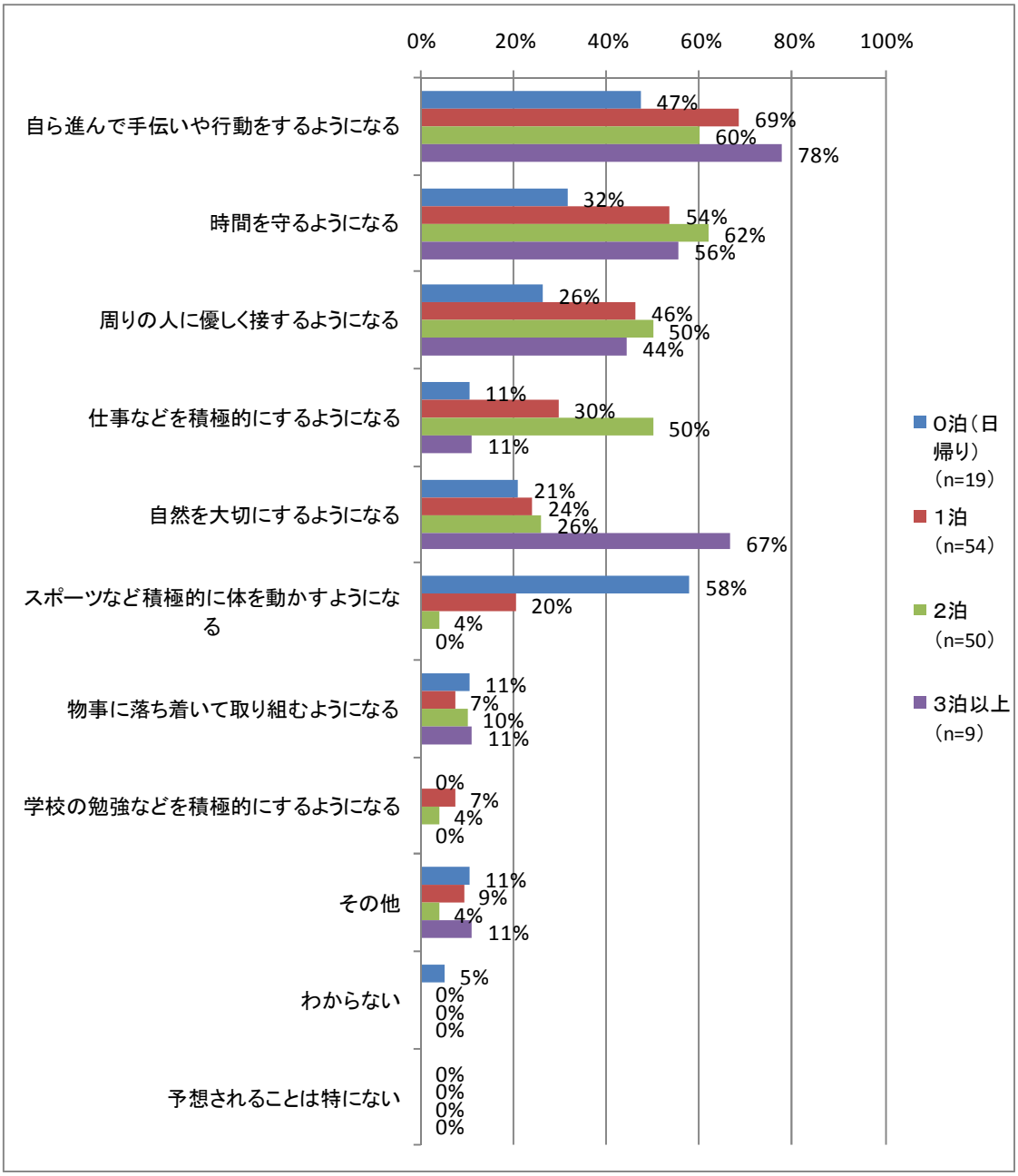


図 22　利用宿泊数別にみた繰り返し利用することによって予想される変容

利用目標別では（図 23）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「時間を守るようになる」などは「自主性や協調性、社会性を身につける」が利用目標の場合に比率が高い。「自然を大切にするようになる」は利用目標が「自然に対して興味・関心を持つようになる」のときに比率が高くなる。

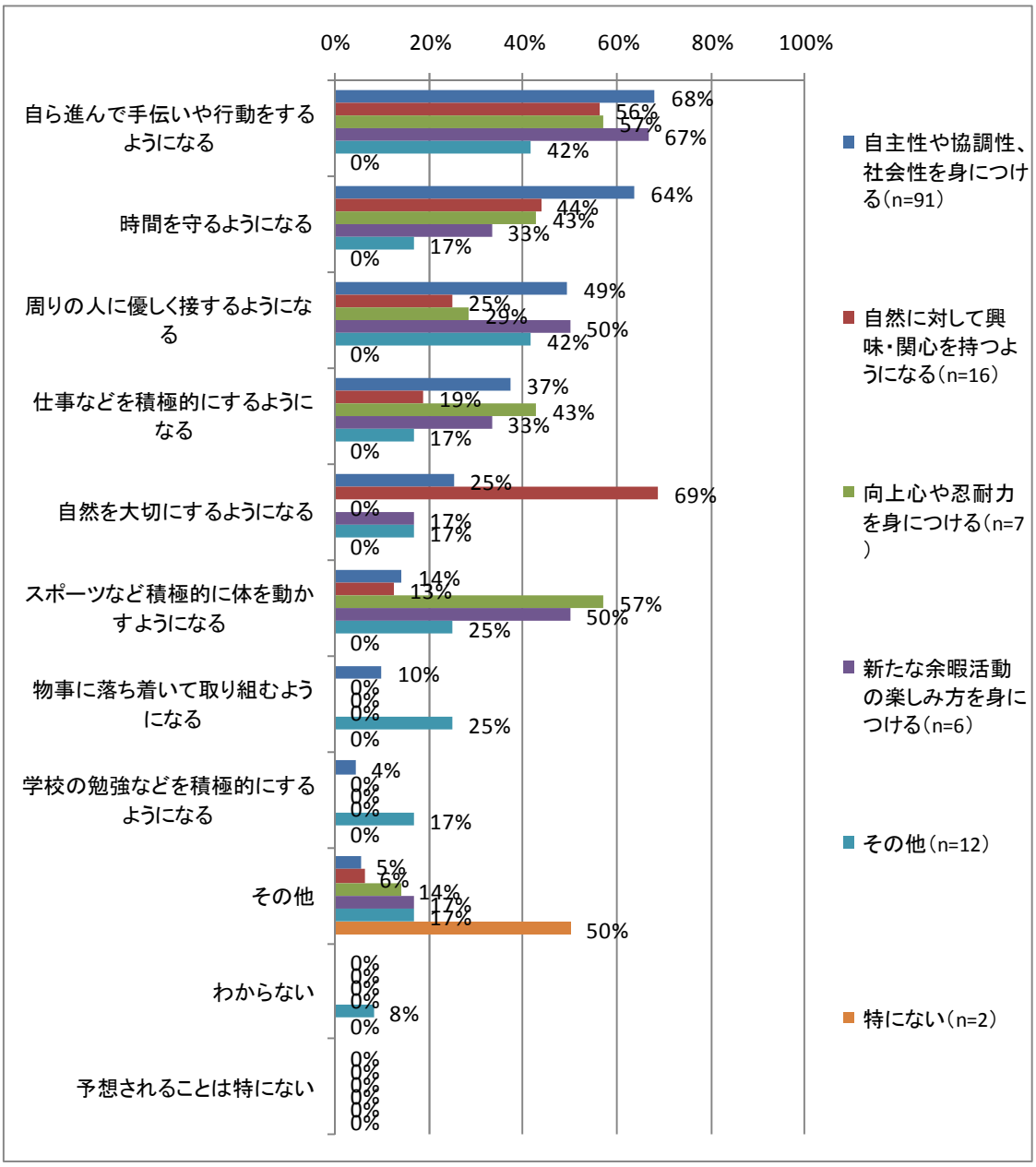


図 23　利用目標別にみた繰り返し利用することによって予想される変容

利用目標の達成度別では（図 24）、「時間を守るようになる」や「仕事を積極的にするようになる」は達成度が低くなるにつれて高い比率となっている。その他にも、「ほとんど期待通りできなかった」のときに最も比率が高くなっている項目も見られるが、今回はこのカテゴリの母数が少ないことに注意する必要がある。

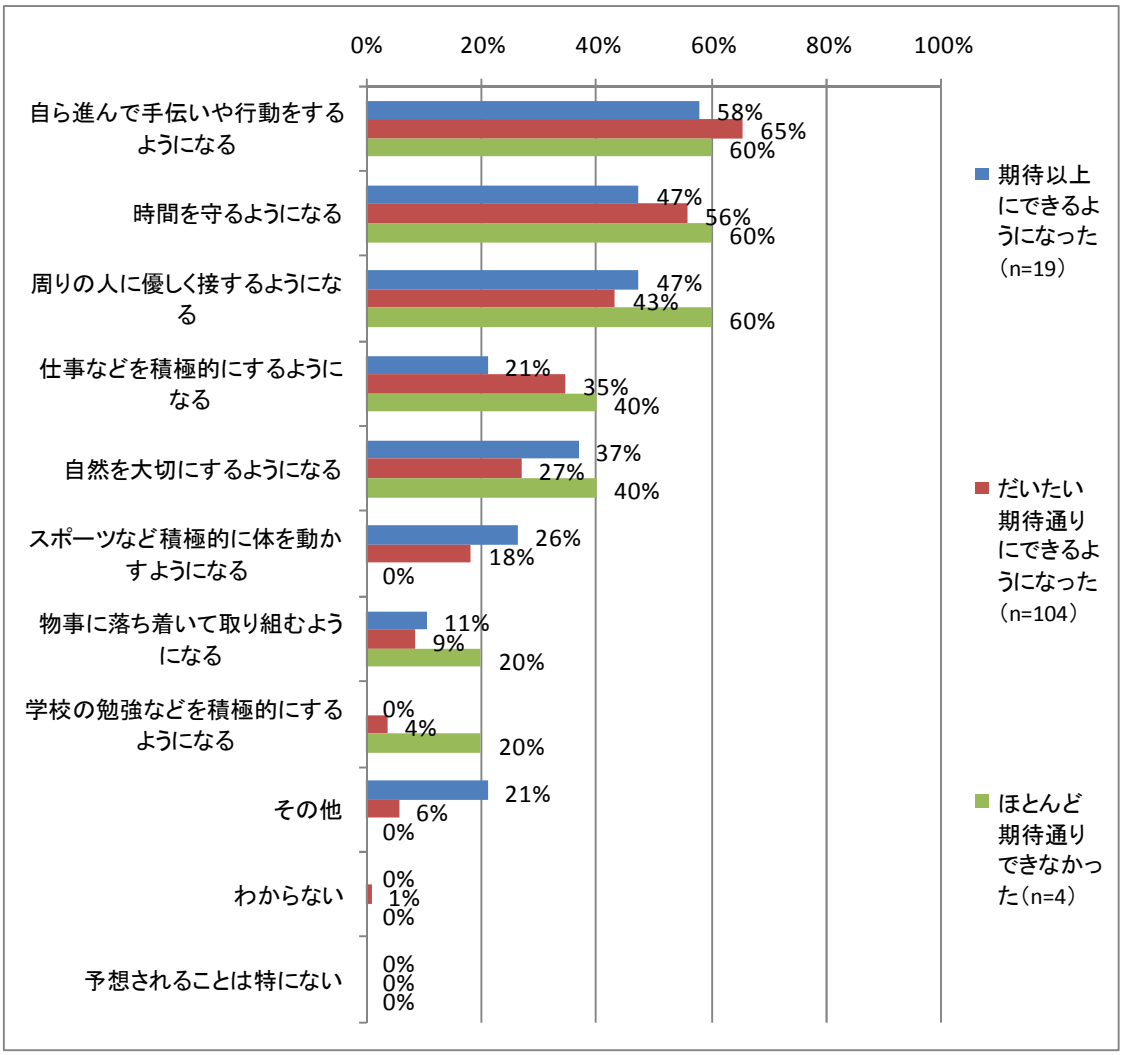


図 24　利用目標の達成度別にみた繰り返し利用することによって予想される変容

Ⅳ　調査結果のまとめと今後の課題

ここまでで示してきた調査結果を昨年度（平成 19 年度）の結果と比較しながら整理すると、次の 4 点にまとめられる。

その第 1 は、利用団体のプロフィールから、センターの代表的な利用者が小学生で、1 泊の利用が最も多いということで、これらは昨年度と変わらないが、2 泊の比率が今年度のほうが若干高くなっている。利用団体の種類は、学校関係が全体の半数を占めており、特に小学校は全体の約 3 割であることはほぼ昨年度と同様であるが、今年度は青少年指導者の比率が 10 ポイント高くなっている。

第 2 は、利用目標は宿泊の有無によっては顕著な違いが見られることで、1 泊以上になると「自主性や協調性、社会性を身につける」が高くなることは昨年度と変わりないが、今年度は「3 泊以上」では「その他」の比率も高くなっている。一方、昨年度は違いが見られた利用団体の種類別については、今年度は殆ど違いが見られなくなってきている。

第 3 は、利用目標の達成度は殆どが「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」でこれも昨年度と同様の傾向で、利用目標の種類別についても、利用目標が「その他」の場合は昨年度と同じく「期待以上にできるようになった」の比率が 3 割を超える。その他、今年度は「新たな余暇活動の楽しみ方を身につける」でも 1/3 が「期待以上にできるようなった」である。また、「3 泊以上」で「期待以上にできるようになった」が 3 割に達していることが今年度の特徴である。

そして第 4 は、利用後の参加者の変容は「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「時間を守るようになった」「周りの人に優しく接するようになった」の上位 3 項目は昨年度と変わりない。さらに今年度新規項目の繰り返し利用することによって予想される変容との関連で見ると、こちらも上位 3 項目は「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「時間を守るようになる」「周りの人に優しく接するようになる」で、利用後の参加者変容との関連性が示唆されるが、一方、利用目標の達成度が低いほうでこの予想の比率が高くなるという特徴も見られる。

今回の調査に限れば以上のようなことが仮説的に挙げられるが、最後に調査上の今後の課題を 2 点述べておくことにしよう。

その第 1 は、昨年度でも指摘したが、2 年目で傾向に違いが見られたことが果たして一過性のものであるのかどうかを検証する意味でもさらに継続して次年度以降も調査を行うことが挙げられる。第 2 は、今年度若干回収率が落ちたことである。他にもさまざまな課題が挙げられるが、以上の 2 点は急ぎ取り組んでいく必要があろう。